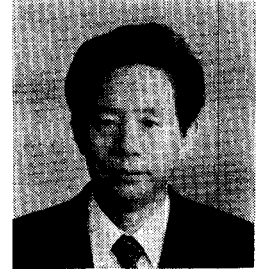


昭和63年を迎えるにあたって

日本オペレーションズ・リサーチ学会副会長
埼玉大学 刀根 薫



皆様、明けましておめでとうございます。本年も日本OR学会が堅実な伸展をとげることを祈念します。顧みますと昨年はOR学会にとって大変意義のある年でした。創立30周年を迎えたことです。これで1世代が過ぎたこととなります。それを象徴するように親子2世代にわたる会員が数組誕生しています。大変よろこばしい現象です。

この30年間にORは大きな発展をとげましたし今後ともいっそうの展開が期待されています。実際それだけの可能性を秘めた領域であります。最もエキサイティングな科学の1つであると私自身は信じています。そこで、日頃ORについて感じていることを述べて新年のご挨拶に代えさせていただきます。

1. ORは役に立たねばならないこと

ORは役に立つ実学です。単なる学問のための学問ではありません。ORの創世期であった第二次世界大戦中ではORは真の実学でした。生きるか死ぬかの戦争中に遊びは許されなかったからです。しかしそれでもモデルを作って現象を説明するというORの基本的なスタンスはそのころから守られてきました。その後いろいろなモデルが創造されてきましたが、それらのモデルを横につなぐ1つの体系が構築され始めました。抽象化が進み、そして抽象化された世界から現実の世界をみるとよりよく理解できるという経験をわれわれは経てきました。そしてまたそのメリットを十分に享受してきました。ところがある時点からアカデミズムの中に一種のメタセオリー的な傾向が発生

します。モデルの上にさらにモデルを作ろうというわけです。この動きには強力な薬と毒が同居しています。下手をすると実の世界と何も関係のない虚空に遊ぶことに終りかねないからです。ここにORの一種の危機が発生します。間違ったアカデミズムはORの進路を誤らせるでしょう。しかし私はこの点に関してはわりと楽観的です。実の世界に関わりのない“遊び”はいずれ衰退する運命にあるからです。多少飛躍するかも知れませんが過度のアブストラクトとなったある種の現代美術や現代音楽や数学などの辿った軌跡を見ればそのことは明らかではないでしょうか。

とにかくORの試金石は実の世界にあるわけです。

2. それでもORはベーシックな学問であること

こんなことを言うとORは地に足をつけて現実ばかりを眺めていなければならないと思うかも知れませんが、そうなのはORの自殺行為です。地面にへばりついてばかりいては空は飛ばませんし、大洋を越えて異なる大陸に行くこともできません。第1、学問としては魅力の乏しいものになります。この点で、ORは実学だけの学問とは全く異なります。

ORは社会現象や企業運営のさまざまな局面に内在している法則性を説明することから始まりま

した。ちょうど、物理学が自然法則を対象としてきたことを社会現象に対して試みています。そして物理学がベーシックな学問であるという同じ意味でORはベーシックな学問です。仮説を設けてそれを検証していくという態度が重要です。そこにORの面白さがあります。数学は道具に過ぎません。そして仮説が検証されれば、それにもとづくオペレーションが可能となります。そのことが、当該の企業体に多くのメリットをもたらします。一度でもこの面白さを味わった人はORの虜になることでしょう。ORがこれまで検証してきた仮説は多数ありますが、まだ十分ではありません。新しい現象が次々に現われるからです。これまでどちらかといえば製造業寄りであったORの目を流通、サービス、金融といった業種にも向ける必要があります。これらの分野には解明を待っている現象が山積しているからです。

ORはこういった現象を“こやし”として育てゆくわけですが、大事なことは、大胆な仮説の設定です。そしてそれが根本的で洞察力に富めば富むほど、解明できる実の世界の外延は大きくなります。このような点はすべてのベーシックな学問に共通したことです。そして、有為な若者にとって魅力のないはずはありません。

3. もっと学会内交流を

われわれの学会は実業界と学界からの会員がちょうどいい具合に混り合っているという意味で全くユニークな学会です。このことはわれわれの誇りとしていいことです。しかしながら、私が見るところ、一部の企業を除いて、十分な理論的解析力をもつスタッフを備えたところは少ないようです。一方、学界の方は現実世界で起こっていることに比較的疎いようです。これでは両者にとって大きな機会損失であるといわざるをえません。そこで、本年は両者の交流をもっと盛んにしてほし

いと思います。そのことによりORはより豊かなものになるはずですが、また企業の方も学界の頭脳を利用できるのでその利点は計り知れないものがあります。今年はこの交流の元年としたいものです。

4. もっと国際交流を

最近米国の大学のOR学科を訪問して感じることは中国、韓国、台湾などからのPh.D学生が目立つことです。日本人留学生の数は昔に比べて少ないようです。これは、日本で学位が取れることと、その後の就職のことを考えると国内に留まっていたほうが有利であるという現実感覚が反映されているとみる人もいます。しかしMITの利根川博士の言われるようにこのことは日本の将来にとっても本人の将来にとっても必ずしも有益なこととは思えません。有為な人材はもっと積極的に国外で研究を進めたほうがよいと思います。学生会員諸君の一層の発展を望むものです。

さて、本年も国際交流は豊富です。8月下旬からの3週間はまさに圧巻です。すなわちアジア・太平洋地域のOR連合の第1回APORS会議(8月24~26日、韓国、ソウル市)、アジア地域で初めて開かれる第13回国際数理計画法シンポジウム(ISMP)(8月29日~9月2日、東京)、世界で初めて開かれる国際AHPシンポジウム(ISAH P)9月6~9日、中国、天津市)です。APORSはIFORSの傘下で開かれますが、この地域の非常に重要な会議となることでしょう。ISMPには海外から大勢の研究者が来日する予定です。ISAH Pには日本からツアーを組むことが決まっています。これらの会議に本学会からも多数の会員が参加されて国際交流の実を上げられるよう切に望む次第です。